

ディック&ジェーン 復讐は最高!

2005(平成17)年12月19日鑑賞(ソニー・ピクチャーズ試写室)

★★★★



監督=ディーン・パリソット/出演=ジム・キャリー/ティア・レオーニ/アレック・ボールドウィン/リチャード・ジェンキンス (ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント配給/2005年アメリカ映画/91分)

……今や「ヒルズ族」は日本人のあこがれの的だが、アメリカではそんなIT企業の計画倒産も……？ エリートサラリーマンから一転して失業者となった若夫婦の奮闘ぶりには頭が下がるが、コンビニ強盗から銀行強盗はちょっと……？ もっともこれはあくまでコメディ展開とし、最後の大勝負は「1人勝ち」を決め込んでいた元CEO（最高経営責任者）を相手とした立派なもの。この映画では「めでたし、めでたし」の結果となったからよかったが、日本でこんな真似をしたらダメよ……。



あくまでアメリカ的、良くも悪くもアメリカ的……？

この映画のテーマは、一流企業で順風満帆のサラリーマン生活を送ってきた夫婦が、会社の倒産・失業という深刻な事態の中、文字どおり丸裸になる直前コンビニ強盗に手を染め、最後には銀行強盗まで決行するという深刻なもの。しかしそこはハリウッド映画。そして主人公ディックに扮するのが、コメディ映画をやらせれば最高といわれるジム・キャリー。だから……？

ライバル間の出世争いの姿などは日本も同じだが、CEO（最高経営責任者）のジャック・マカリスト（アレック・ボールドウィン）が、用意周到にうまくその持ち株を手放しエスケープすることによって会社を倒産させてしまうやり口などはいかにもアメリカ的。

そしてディックとジェーン（ティア・レオーニ）のおしどり夫婦（？）の落ち目ぶりもコメディタッチながらいかにもアメリカ的……？

他方、クビになった社員がみんな苦勞しているのに、1人ジャックだけが優雅な生活を送っている姿を見て、俄然その復讐に立ち上がったディックの発想には、多少浪花節的な匂いも……。しかし、最終段階で展開される、大逆転満塁ホームランともいえるオチは、やっぱり良くも悪くもアメリカ的……？

ヒルズ族がゴロゴロ……？

日本では楽天の三木谷浩史やライブドアのホリエモンこと堀江貴文、そして村上ファンドの村上世彰らが入る東京の六本木ヒルズが超有名となり、ITメディアの成功者といえみんなこのビルに集まっているようなイメージとなっている。しかし、これはいかにも日本的なスケールの話で、アメリカではこんな「ヒルズ族」があちこちの都市、あちこちの超高層ビルの中にゴロゴロ……。

ディックが勤務しているITメディア開発企業グローバダイン社もその1つで、ディックは若手の有望株……？ そんなディックが今日ライバルを押しつけて、最上階の51階を占拠しているCEOジャックの腹心であるフランク（リチャード・ジェンキンス）から呼び出されたのは何のため……？ 通常の業務で上司から呼ばれてディックがエレベーターで上がっていくのは、せいぜい30数階か40数階まで。今まで足を踏み入れたことのない最上階へディックがはじめて上るのは、コミュニケーション本部長への昇進を正式に告知されるためだ。

そんな有頂天状態にあるディックがコミュニケーション本部長として最初に与えられた仕事は、テレビの経済番組に出演して自社のPRをすることだった。ところが、そこで突如対応しなければならなくなった事態とは……？

内助の功の大変さと大切さは、日米同じ……？

ディックは一流企業のエリートサラリーマンだが、その1人息子のビルと愛犬のスポットを含めた一家を支え内助の功を果たしているのは妻のジェーン。立派なマイホームを手に入れ、隣の家が購入したベンツの新車には負けるものの、BMWで通勤していたディックも、コミュニケーション本部長への昇進が決まるやただちに庭の芝生敷きやプールづくりを決定。そのうえ、それまで家計を支えるべく(?)共働きをしていたジェーンも、この機会に仕事をやめて専業主婦に

なることに……。アメリカの女性はお金のためではなく、自分の信念として社会で働きたいと思っているのかと思っていたが、ジェーンは全然そうではなく、夫の稼ぎで生活できるのであれば愛する息子とゆっくり過ごす時間が増えると単純に大喜び……。

こんな夫婦仲なら、それまでの内助の功は大変だったようだが、夫もその大切さを十分理解してくれているようで、まさに2人は相性抜群のおしどり夫婦……。

2人ともちょっと見栄っ張り……？

ディックとジェーンは似た者同士で相性抜群のおしどり夫婦だが、玉にキズといえば、ちょっと見栄っ張りなところ……。会社ではライバルであるオズとの男同士の出世争いがあり、プライベートではお隣さんのクリーマン夫婦との見栄の張り合いがあるが、その姿を見ていると2人の性格がよくわかる。したがって、グローバダイン社が倒産し、今は失業者となったディックが次に探す就職先は、役員待遇をしてくれる会社ばかり。しかし現実は……？

決して2人とも働くこと自体がイヤなわけではなく真剣に仕事を探しているのだが、ちょっと見栄っ張りな2人が選ぶ仕事はミスマッチばかり……。

そこまでやるか！ コメディタッチの仕事選び

この映画は91分という短いものでスピーディーな展開だが、ディックとジェーンの仕事選びのストーリーについては、これでもかこれでもかと思われるほどさまざまなパターンを紹介している。その中で最も面白く、コメディタッチなものは、コンビニ強盗に至る直前の2人の仕事選び……？

ディックが雇っていた家政婦はスペイン人。そのため息子のビルがヘンなスペイン語をしゃべっていることが少し気になっていたディックだったが、ディックがこの家政婦の紹介で就こうとした仕事は……？ 他方、文字どおり身体（顔？）を張って、化粧品テストというヤバイ仕事に挑んだジェーンは……？

パンチを食らったためまともな英語がしゃべれなくなり、入管に収容されてしまったディックと、化粧品にかぶれて（？）見るも無惨な顔になったジェーンの姿を見ていると、コメディタッチながらも、これほど冷たい世間の風に思わず

ットすることに……？

自社株や企業年金の価値は……？

ディックが勤務していたグローバダイン社は立派な IT 企業だったようだが、CEO がその持ち株を手放して会社が倒産してしまうと、それまで宝物のように社員が考えて持っていた自社株は紙切れ同然となるし、将来を保証してくれていた企業年金もパー……。したがって、ある日突然失業者となった旧社員たちは、仕事探しの苦勞の他、これらの財産を一挙に失うという悲劇に見舞われたわけだ。しかしその価値を取り戻す手段は……？ それがあるから面白い……。

この映画のサブタイトルである「復讐は最高！」とはまさに言い得て妙……。ニッチもサッチもいかない、ドツボ状態に陥った場合でも、人間にとって大切なことは、前向きの知恵。さて、あなたならこんな場合、どんな知恵をしぼることができるかな……？

アメリカはサイン社会

日本でも近時はかなりサインが普及したが、今なお大切なことは全てハンコ、とりわけ実印と印鑑証明書が必要。しかしアメリカではサインがすべて。したがって映画でも、サインをネタとした面白いものが多い。ちなみにアラン・ドロン主演の『太陽がいっぱい』（60年）はフランス映画だが、主人公が親友のサインを真似るため特訓を重ねるシーンはリアリティがあり、思わず興奮したもの。また12月18日の夜9時からの日曜洋画劇場でやっていた『コレクター』（97年）でも、最後の最後に、ある「サイン」からある意外な人物が真犯人だと気づくことに……。このように、ヨーロッパもアメリカもサイン社会。

ということは、サインをうまく偽造するかもしくは差し替えることができたなら……。誰でもそう考えることは当然で、問題はいかにうまくそれができようということ。この映画の前半で見せるディックのドジぶりからは想像もできないような切れ味を見せるのが、終盤の復讐劇。元 CEO のサインをテーマとしたその復讐劇は、まさに最高！

2005(平成17)年12月20日記